

第2室

(1) 15:30 ~ 16:00 (2) 16:10 ~ 16:40
(3) 16:50 ~ 17:20 (4) 17:30 ~ 18:00

第2室 (1)

SNS X

WCF における修正タスクが正確性向上に与える影響—学習者の視点から—

米村 大輔 (名古屋大学大学院生)

L2ライティングにおける修正フィードバック (written corrective feedback、以下 WCF) の研究において、これまで指導者が行う修正に対するパフォーマンスの変化に目が向けられがちだったが、指導者の修正に対して学習者がどのような行動を取るのかという学習者側からの視点が極めて重要である。学習者が行う修正タスクは直接 WCF・間接 WCF における正確性向上に貢献しており、CF タイプの傾向も捉えることができる。直接 WCF では文法全般での学習効果が期待できる一方で、間接 WCF では修正タスクを通じ、形態素において特有の正確性変化を示している。しかし学習者がどのようなタイプの修正タスクを行えば効果的に正確性を向上できるのかは未だ明らかにされていない。

また、これまでの WCF 研究では冠詞や規則動詞の過去形など規則で説明できる目標構造と前置詞や不規則動詞の過去形など規則で説明できない目標構造の正確性変化の違いにも着目している。これまでの研究から正確性の向上度は目標構造に規則性があるかどうかに関係している可能性が考えられる。例えば直接 WCF においては目標構造が規則で説明できないに関わらず一定の効果を見ることができ、目標構造が複雑であればさらに学習効果が期待できる (Ene & Kosobucki, 2016)。一方間接 CF においては目標構造がパターン化していて規則で説明できる項目は一定の効果を得ることができ、規則で説明できないものには効果が期待できない (Poorebrahim, 2017)。このように目標構造の規則性は CF タイプによって正確性変化に影響を与えているが、学習者による修正タスクの種類によってどのような影響を及ぼすのだろうか。本研究では目標構造の規則性に着目し、学習者が行う修正タスクの種類によって日本人高校生の正確性向上度がどのように変化するかを検証した。

第2室 (2)

認知言語学的観点から考える英作文の指導法

松井 柁人 (南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻)

英語のライティングは生徒と教師の双方にとって負担である。生徒側には例文や文法の丸暗記や上達を感じられないなどの負担がある。また、教師側には生徒に納得のいく説明をすることや、何度も同じ間違いを添削するという負担がある。しかし認知言語学的観点を用いることでこれらの負担を軽減することが可能だと考える。そこで本発表では日本人英語学習者にとって用法が紛

らわしいと思われる三つの表現に焦点を当て、よりよい指導法を考察する。本発表で扱う表現は次の3つである。① be と have の使い分け、②受動態と能動態の使い分け、③「思う」と think の使い分けである。これらの表現について、次の2つの調査を行った。調査①では、69人の高校生にこれらの表現を用いた日本語文を英訳してもらい、誤答や使用表現の傾向を分析した。調査②では、数人の生徒を対象に英語の指導に関して求めるものについてのインタビューを実施した。調査①の結果、be と have の使い分けでは、主語の性質によって使い分けに差が出ることが、受動態と能動態の使い分けでは、日本語の事態認知が英語のライティングに影響を与えるということが明らかになった。また、「思う」と think の使い分けでは、日本語文の表現が「思う」の時と「したいと思う」の時とで英語での think の使用頻度に差が出ることが明らかとなった。調査②からは、生徒がライティングの授業内であってもスピーキングなどの言語活動をより求めていることや、授業で習う似た意味を持つ英単語の使い分けが難しいということが明らかとなった。先行研究の内容と調査の結果から、日本語と英語の比較をしながら英語の感覚や視点に慣れることが生徒と教師の双方にとって負担の少ない、効果的なライティングの指導には必要であることを述べる。またその際に、スピーキングなどの言語活動や認知言語学的観点に基づいた説明を用いることが効果的であると考えている。

第2室 (3)

Functional Adequacy を反映したライティング評価規準の妥当性論証

—観点別学習状況の評価への応用を目的として—

菊原 健吾（長野県上田高等学校）

国立教育政策研究所（2021）は高校外国語科において、「五つ（三つ）の領域」について、三つの観点（「知識・技能」等）から評価規準を作成するよう求めている。他方、第二言語習得研究で Functional adequacy (FA) という概念が提案されている。これは「課題達成及び意図の伝達がどの程度十分か」を反映している (Kuiken & Vedder, 2017)。本研究では、FA を反映したライティングの分析的評価規準が、高校生の「書くこと」における「知識・技能」と「思考・判断・表現」を評価するためにどの程度適切か検証した。なお、検証には Knoch and Chapelle (2018) による妥当性論証の枠組みを用いた。

日本人英語学習者97名が参加した。ライティング課題は3つで、58名の高校2年生が課題1及び2、39名の高校3年生が課題1及び3に回答した。回答は英語教育を専攻する日本人大学院生3名によって評価された。評価規準は「内容」、「課題達成」、「理解可能度」、「一貫性・結束性」の4観点で構成され、各観点は6段階であった。「受験者（生徒）」、「評価者」、「課題」、「評価観点」の4相を含む多相ラッシュ分析を行った。

主な結果として、①各観点の段階が十分機能していなかったこと、②評価者と評価観点の間にバイアス傾向がなかったこと、③1名の評価者と課題2の間に有意なバイアスがあったこと ($t=2.01, p=.046$)、④評価者の適合度指標は基準内 ($0.60 \leq \text{fit statistics} \leq 1.40$) であり、評価者内で一貫した評価を行っていたこと、⑤最も厳しい評価者と最も易しい評価者のフェア・スコアに無視できない差 (1.04) があったこと、⑥各評価観点の適合度指標が設定した基準内で、点双

列相関係数が同程度の正の強さ ($r_{pbs} = 0.43-0.45$) であったことから、評価観点が1つの特性を測定していると考えられること、⑦受験者の相における層の値が7.23で、評価規準が受験者をおおよそ7つのレベルに分けたことが示された。本発表では結果に基づき、FAを反映したライティング評価規準の目的に対する適切性と応用方法を考察し報告する。

第2室(4)

SNS X

中学校のライティング活動における思考ツール導入効果

吉田 悠一（三重県津市立成美小学校）・清水 公男（文京学院大学）

英語のライティング活動は思考・判断・表現力が求められる総合的言語活動である。中学校の新学習指導要領における「書くこと」に関する指導では、学習者が関心のある事柄や日常的・社会的な話題等の広範なテーマについて、まとまりのある文章を書くことが求められている。しかし、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書を見ても、与えられたテーマに対し考えを整理し、コミュニケーションに支障をきたすことなく内容を伝えることや、資料を読み取りその問題に対する自分の意見を書くことに関しては、これまでと変わらない課題が見られた。この課題に関して、大井（2021）他の提唱したまとまった文章を書くための手法としてのパラグラフ・ライティング指導は、一定の効果をあげてきた。しかし、英文の論理構造を単に理解させ、ライティングのテーマから想起される学習者自身の考えや気持ち等を機械的に整理させるだけでは、英文を論理的接続詞（ディスコースマーカー）を使って並べかえるだけの作業に留まってしまうがちな点である。ライティング指導において論理性は重要であるが、いきなりパラグラフ・ライティングに取り組ませるのではなく、学習者がテーマに沿って伝えたいコンテンツを整理しながらアイデアを発想することを促す足場掛けが欠かせないと考えた。そこで着目したのが、学習課題に取り組み、解決するための手掛かりを発想・整理するために他教科でも採用されている思考ツールの活用であった。本発表は、公立中学校3年生（習熟度別クラスの基礎コース約70名）を対象とし、2021年4月から2022年2月末までに行われた授業実践研究である。思考ツールを活用した結果、学習者が題材をどのように捉え、学習課題に対する学びが生まれていったのかを発表する。英語授業における学習者成果物や振り返り記述等の分析結果から、パラグラフ・ライティングに替わる、英語授業における思考ツールの活用可能性を提案したい。